

---

# 白の追憶

まんまるねこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の追憶

### 【Nコード】

N5429A

### 【作者名】

まんまるねこ

### 【あらすじ】

私達の学校の保健室は、まるで異世界だった。雑踏のような毎日の中で、そこだけが何も変わらない。いつだって私達を魅せてくれたあの人は、そこにいる。

## プロローグ

ピアノを弾く白い指の感触、時間が経って少し渋くなった紅茶の味、夕日に映える絵への憧れ……。

保健室で刻まれたあの時、私達は確かにあの人といった。

全く違う顔を併せ持つ女の子と私達の時間。

高校の保健室での、残酷で、切ない、可憐な物語。

少なくともここは、そういう場所なのよ

## 指 (Transient Melody)

なんとというか・・・そう、刹那的。

同級生がはしゃぐのを見て香奈は思った。

最新ヒット曲が暗に自分に、おまえは不釣り合いだと投げ掛けている気がした。

新人生歓迎会などこんなものだ。

そう考えて、もう一度舞台に目をやる。

照明が落とされた舞台の真ん中には、今までのばか騒ぎに不釣り合いなほど静かにピアノが鎮座していた。

そして急に音もなく女の人が現われた。

規定通りに着こなした制服が、とてもよく似合っている。

高飛車ではない。

むしろ逆。

緩やかな細い肩から繋がるほっそりとした白い指が、深慮深そうに鍵盤に乗せられた。

そして、まるで呼吸をするぐらい自然に、その人は弾き始めた。

ひそやかなその曲は、あの可憐な指と共に、いつまでも香奈の記憶の中にあつた。

次にその人に会ったのは、中間考査明けの肌寒い日だった。

いつもは行かない旧校舎の前を通った時、ふと聞き慣れないピアノの音色が聞こえた。

香奈は音楽関係はからっきしだ。

楽譜が読める人は、もはや人間ではないと思っている。

だから、当然、クラシックも聞かないし、興味もない。

けれど、気付いたら、曲が流れてくる保健室の扉を開けていた。

「あら・・・」

大して驚きもせず、先客は顔をあげた。

保健室には似付かわしくない黒のビロード張りのソファーに腰掛け、膝には本が開かれています。

その上に投げ出された白い指に、香奈は目を奪われた。

「入ってこないの？」

扉を開けたまま茫然と立ちすくむ香奈に、由佳は微笑んだ。

そして、

「どござ」

と白い長い指で近くの椅子を指し示した。

「あ、で、でも私、怪我なんかしてないんです」

香奈は、我ながら見事な慌てぶりだと内心思った。完全に雰囲気負けしてしまっていた。

「見たらわかるわ。怪我をしてるよりそのほうがいいでしょう？」

そんなこと最初から分かり切っている。

そう暗に含ませ、また由佳は本に目を落とした。

「いてもいいんですか？」

そつと扉を閉める。

現実から切り離された異空間に香奈はいた。

「ここはそういふ所よ」

ピアノの音が変わった。

保健室は、まるで別荘のような作りだった。

真っ白なカーテンが縁取る、張り出しの窓。

アンティークな本棚には、普通保健室にあるような応急処置なんかの説明がなされた本はなく、詩集や洋書が当たり前のように並んでいた。

それら全てが、自分を拒絶しているようだった。

壁だの床だのアンティーク家具だのから拒絶され、孤立しているように感じた。

時折、夕日に反射して光る、由佳の胸元の無機質な『工藤由佳』という名札だけが、唯一自分と同じそぐわぬ物だった。

軽快な音楽が立派なオーディオセットから流れている。

「ヴィヴァルディの春よ」

由佳は香奈の疑問をすくい取るように言った。

「時期はずれているけれど、好きなのよ」

とも。

それからしばらく香奈は保健室に通った。

由佳は当たり前前のようにそこにいて、CDの曲と共に香奈は時間を過ごした。

ずいぶんクラシックの曲にも詳しくなった。

好きな曲さえもできた。

けれど、家に帰るとその曲はまるで違うもののようになる。由佳がいて初めて曲が曲として成り立っていた気がした。

夏休みの前の日は雨だった。

保健室に流れる曲は、知らない曲だった。

「雨垂れって曲なの。ちょっと安易だったかしら」

窓の向こうに降る雨を見ながら由佳は呟いた。

「今、何を考えてるの？」

珍しい由佳からの突然の質問だった。

「特に何も」

少し躊躇して香奈は答えた。

真意は読み取れなかった。

「うそ」

穏やかに由佳は囁いた。

「何を思ってるの？教えて」

「クラスの人って、なんか刹那的」

少し迷って香奈は答えた。

刹那的の意味はよく知らなかったけれど、少し前に由佳が使っていたの響きがとても魅力的だったのを覚えている。

「なぜ？」

楽しそうに由佳は言った。

「夏休みの予定のたてかたとか」

「その瞬間しか楽しめないのね」

香奈はそういう愛がある由佳が好きだった。

他人のことにも傷付ける由佳は優しい人だった。

由佳は少し黙って言葉を選んだ。

「仕方ないわね。いろんな人がいるから。でも、少し足を入れてみるのも、手かもしれない」

由佳のは提案ではない。

決定。

由佳はいつも先のことをきちんと決めている。

香奈は、もうここに来ることはないだろうな、とふと思った。

「由佳さんは、刹那的だって思ったことはないですか？」

最後に、と香奈は立ち上がって聞いた。

「いつも感じているわ。同時にこの瞬間が永遠だとも」



あの時、憧れた白い長い指を組んで由佳は微笑んだ。

夏休み、流れているクラシックを聞いて思い出すのは、ピアノの上を密やかに舞う、あの指。

紅茶 〔Broken Heart〕

紅茶の香りが保健室に広がった。

オレンジペコというらしい。

由佳のお気に入り。 たしかジノリのティーカップが軽い音を立てて目の前に置かれた。嫌味ったらしく、たっぷりのミルクを添えられて。

「今日はどうしたの？」

由佳は静かに龍也を見つめた。

「どうもしてない」

これがいつもの放課後。

クラシックが流れる中で、由佳が煎れた高い紅茶を高級なティーカップで飲むのがお決まり。我ながらずいぶん乙女チックだと思う。

「雨よ」

由佳は呟いた。

磨かれた窓に雨粒が伝っていく。

由佳の良いところは、頭の回転の速さ。

三年間、同じクラスで仲違いしない女子は由佳ぐらいだったから。

「今日さ、告られた」

龍也はカップを持ち上げながら挑発的に由佳を見た。  
ほんの一拍間をおいて、由佳は、そう、と答える。

「どんな子？」

誰？とは聞かない柔軟さがいい。

「後輩に紹介されたんだ」

龍也は、彼女の名前や住んでいる場所、血液型 Aだ や兄弟  
構成など、思いついたことをいくつか言った。

「それで？感じはよかったの？」

興味なさげに由佳は言った。

「どうだろ、よくわかんねえんだよなあ」

そう、と言った由佳の顔は余裕で、ちょっと楽しそうでさえあった。

試験最終日の終礼は嬉しい。

みんなが一斉に椅子を引く、がたがたという音も嬉しい。  
ちらりと視線を走らせると、由佳がクラスメイトに答を聞かれてい  
るのが目に入った。

毎度のように学年トップの由佳の周りには、未練がましく答え合わ

せをしている連中が群がる。

最終日の科目は地理か生物の選択と現国だった。

どちらも比較的楽だったので、答案を伏せてからぼんやり窓の外を眺めている時間があった。

晴れて、いい天気だった。

龍也達の教室の窓からは、大通りと並木と信号と横断歩道が見える。空と、向かい側の建物の屋根も。

教室は静かで、ときどき聞こえる咳払いと、鉛筆の音だけがしていた。

由佳が、伏せた答案の上に肘をついて、窓の外を見ている。明日から試験休みだ。

その日の午後、由佳と街に出た。

待ち合わせのカフェにはすでに由佳がコーヒーを飲んで待っていた。由佳は少し視線を上げ龍也を見ると、微かに微笑んだ。

「わりい、遅くなった」

「まだ、約束の5分前よ」

カップを持つ手首には華奢な金色の時計。時計に対して造詣は深くないけれど高いことだけはわかった。

「出る？」

龍也が訊き、由佳はそれにしたがった。

「スウォッチが見たいんだけど」

由佳に並んで歩きながら言う。

「じゃあ、ソニプラね」

由佳の口からソニプラという言葉が出てきたのが、ずいぶんおかしかった。

109の地下のソニプラは、例によってすごい混雑。

なかには暇な女子大生とか、何か間違えちゃったんじゃないのかっていうようなおばさんも混じっているけれど、大抵は高校生だ。

九割方女。

ブスばかり。

二人でスウォッチを見る。

「ねえな」

「高橋がつけるの？」

由佳は龍也のことを高橋と呼ぶ。

龍也に限らず男はみんな名字だ。

「つけると思うか？」

一応訊いてみると、ショーケースに映った由佳が笑ったのが見えた。

「そうだったのなら、軽率ねって言ってたわ」

由佳の、笑いを含んだ声。

結局、なにも買わずに外に出た。

「テストやべえかも」

空を仰いで龍也が言う。

「欠点にならないように願うのね」

乾いた声が少し後ろから届いた。

それからすぐに別れた。

由佳も龍也も無駄に外を歩くのを好まない。  
ウィンドシヨツピングの意味はもはや理解不能だ。

「じゃあ、また休みあけに」

由佳の声に妙に淋しくなった。

休みあけの放課後、夕暮れのなか由佳がいつものように紅茶を煎れた。

その後で、さつきまで人が寝ていたように乱れているベッドを華奢な背を龍也に向けて 直し始めた。

それがむちゃくちやだが、そういう意味だと思っただし、次の行動を許可してくれているんだと思った。

それで、そうした。

抱き締めてキスをし、ベッドに押し倒したのだ。  
乱暴だったのかもしれない。

けれど経験は二人とも　この歳にしては十分なほど　あつたら。

押し倒されたとき、由佳は困惑の声を上げた。嫌がっているようにも見えた。

二人とも制服を着たままだったが、龍也はもう十分いきり立っていて、最終的にはこれを挿入しなければならない、と、考えていた。憶えているのはそこまでだ。

後の記憶は断片的で、ともかく最後まで事を終えてしまった、ということしか憶えていない。

行為の間、由佳は

「乱れ」

たり

「声をあげ」

たりしなかった。

あつという間だった。

「なぜ？」

すでにベッドから出た由佳が静かに聞いた。

怒ってはいない。

でも、龍也は答えられなかった。

理由がないなんて。

理由なんているのだろうか。

二人でベッドを挟んで散らばった制服を着た。不思議なほど気まずくない。

あるのは、喪失感とけだるい空気だけ。

「紅茶が冷めちゃたわ」

由佳はぽつりと呟いて紅茶を啜った。

向かいに座って飲んだ紅茶は、冷めて渋くなっていた。

龍也の日常は変わっていない。

今日は彼女と会っし、明日は部活の試合だ。

けれどもあの日以来、保健室に行っていない。

冷めた紅茶の渋みが、龍也の失恋の味。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5429a/>

---

白の追憶

2010年10月12日01時49分発行